

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	黒田 祐我
論文題目	中世後期のカスティーリャ＝グラナダ間における戦争と平和 —「境域(frontera)」からみる異教徒間交渉の実像—
審査要旨	
1. 本論文の概要	
<p>本論文は、中世後期におけるカスティーリャ王国とグラナダ王国間の戦争と平和のあり方を対象として、その問題を、両王権が取り結ぶ王国間の休戦協定から考察するとともに、「レコンキスタ」の最前線の「境域」の動向にも着目し、「中心」の王権とは独立的に和戦を展開した「境域」社会の分析から、中世後期の「レコンキスタ」が王権や軍事貴族層に担われた戦争と平和の歴史である以上に「境域」社会の相互交渉の歴史であったことを解明するものである。構成は、序論、第一部、第二部、終章、結論からなり、論文中には図表、地図が挿入され、末尾には参考文献が付されている。</p> <p>まず「序論—「レコンキスタ」の歴史から「境域」史へ」では、これまでの「レコンキスタ」の研究史が回顧され、その問題点が指摘される。従来「レコンキスタ」は、西ゴート王国に遡るキリスト教世界の再建の戦いと考えられてきたが、近年ではむしろ、台頭する軍事貴族層が世俗的な野心により行った領土拡大運動と理解されることが多い。だが、これまでの研究は主として軍事的な征服が華々しく行われた中世盛期の断片的史料から「レコンキスタ」像を構築しており、両王国が長期間、ほぼ同じ国境線上で対峙した中世後期の「レコンキスタ」の実態の解明はいまだ十分ではないことが指摘される。</p> <p>このような問題意識に立ち、第一部「中世後期におけるカスティーリャ王国・グラナダ王国関係」では、中世後期にカスティーリャ王国とグラナダ王国の間で締結された王国間休戦協定が分析の対象となる。休戦協定はこの時期、数年ごとに頻繁に締結されたが、その特徴は、中世後期の戦争のあり方と密接に関係するものであった。つまりこの時期、両王国が「境域」で行った戦争は、損失の大きい会戦ではなく消耗戦や拠点奪取の戦いであり、カスティーリャ王国にとり休戦協定は、できる限り多くの貢納金を取り立て、グラナダ王国を疲弊させるための手段として用いられていた。したがって両王国間の休戦協定は、戦争行為と連続する戦いの一環であったともいえ、ここでは「戦争と平和」の二者択一があてはまらないことが強調される。</p> <p>続いて第二部「「境域」における「戦争と平和」—カスティーリャ＝グラナダ「境域」社会の複合性」では、カスティーリャ王権がトラスタマラ朝期になると「中心」の王権から離れた「境域」では、ますます王国間の休戦協定とは無関係に和戦が決定され、独自の論理でグラナダ王国との共存を図る状況が見出されることが論証される。第二部ではとくに、これまでの研究で十分に顧慮されなかった、「境域」のアンダルシア、ムルシアの諸都市の議事録、都市間の書簡などが克明に分析され、「境域」社会の実態が解明される。これら史料の分析から、「境域」では越境暴力が頻発したものの、同時にその暴力行為を管理する「境域」独自の慣習—越境騒擾裁定人、足跡調査人、捕虜返還交渉人などの活動—があったことが提示され、「境域」が「戦争遂行型社会」とも「平和維持型社会」ともいえない、戦争と平和が分かちがたく結びついた社会であったことが結論として導かれる。</p> <p>「終章—「レコンキスタ」の完遂に向けて」では、「レコンキスタ」が長期にわたり停滞したにもかかわらず、15世紀末にカスティーリャ王国が戦争によりグラナダ王国を滅ぼすにいたった原因として、カスティーリャ王国におけるムスリムなど異教徒に対する認識の転換や、ヨーロッパ世界の国際情勢の大きな変化が挙げられる。そして最後の「結論」でこれまでの議論が要約され、「境域」概念の他地域との比較可能性が展望される。</p>	
2. 本論文の評価	
<p>本論文は、「中心」と「境域」という基本的な枠組みを用いながら、「中心」のカスティーリャ・グラナダ両王権による王国間休戦協定の分析と「境域」社会の分析とを関連付け、中世後期の「レコンキスタ」の全体像を新たな視点から構</p>	

築した点で評価できる。何より、従来の「レコンキスタ」研究が十分な分析対象としなかったアンダルシーア、ムルシアの古文書館に収蔵された中世後期の国王書簡、都市間の書簡、都市の議事録などの地域史史料を克明に分析し、「境域」の民衆レベルでの宗教を超えた相互交流や紛争解決の様相を明快に浮き彫りにした点は、従来の「レコンキスタ」像を塗り替えるものとして高く評価できる。

このような評価を前提とした上で、「境域」の克明な分析に比べ、それと対をなす「中心」の分析が少なく感じられる点や、「境域」の地域間の差異が曖昧な点は、今後深めるべき課題となろう。また「レコンキスタ」の集大成であるカトリック両王のグラナダ戦争が、中世以来の伝統的「レコンキスタ」といかなる点で断絶し、また連続しているのかについても、今後、十分な検討を行うことを期待したい。

いずれにせよ本論文は、先行研究の問題点を的確に指摘し、一次史料の克明な分析に基づき、中世後期の「レコンキスタ」の新しい歴史像を提示しえた点で、我が国のスペイン中世史研究の新しい局面を拓くものであり、博士(文学)早稲田大学の学位に値するものである。

公開審査会開催日	2013年4月13日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	甚野 尚志
審査委員	流通経済大学・教授		関 哲行
審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	博士(文学)京都大学	井上 文則